人生の〈救い〉としての詩（鮎川信夫）

詩が扱う主題には、生命や愛の賛歌だけではなく、人生の暗い面、はかない面を取り扱ったものがたくさんあります。しかし、悲しみの歌でも、それが生活の奥底に触れ、人間性の真実につながっておれば、私たちを強く感動させます。言うまでもなく私たちの人生は、喜ばしいことや楽しいことばかりではありません。むしろそうした輝かしい瞬間は移ろいやすくはかないものであって、つらいこと、悲しいことがいくらでもあることを、誰しも経験しております。したがって、私たちの詩も、そのような人生の暗い面から多くの素材を見いだし、生活の真実を啓示しようとします。ある意味では、われわれが本当に一人の友を求め、心の慰めを必要とするのは、人生に幻滅を感じたときだと言えるでしょう。

私たちは、決定的最終的な救いが、この世に存在しえないことを知っております。人間の生活にとって、最終的なものはありえず、いつでも〈救い〉は瞬間的なものにすぎません。それが、生存の宿命というものではないでしょうか。そうとすれば、私たちは苦痛や困難、あるいは幻滅によって、自己破壊の道をたどることなく、それから生長してゆくようにしなければなりません。詩は、そのような人間のために、最良の友となることができます。